

滴水の潟に一艘の舟
眼前には赤い蓮の花
ここは干された潟なのに
確かに樅の音が聞こえ花の香が漂ってくる
鍮潟は在り続け
その水香と潟風は流れ続ける

私は今、潟に入ることが出来ない
私の中の<水>を減水したために
それでも開墾碑は私を抱く
すると
足下から様々な動植物が私をよじ登り
記憶の扉を開けに来る

潟は干上がり
天の川を潟に映したい望みは絶たれ
再び天を見上げれば
銀河鉄道は涙を吐きながら
魚群の化石を蹴散らし
くねりながら渡っていく

国見修二

「ドアを開ける」「鍮潟II」「天の川」
(詩集「鍮潟」所収)より

潟の記憶展

—そこでは風土と生活と人がいつも握手していた—

2019年 8月 6日 (火)
～ 10月 6日 (日)

休館日 月曜日 (8/12、9/16、23 は開館)、8/13、9/17、24

9:00 - 21:00

会場 砂丘館 (旧日本銀行新潟支店長役宅)

観覧無料

失われた潟は

写真を、
絵を、
詩を、

ネイチャーアクアリウムを生んだ

主催 砂丘館 (指定管理者: 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体)
協力 アクアデザインアマン、潟東歴史民俗資料館、新潟と会、Bricole、豊かな越後平野の原風景を考える会

表紙 干拓前の鍮潟 (よろいがた)
「砂丘地城空中写真 (1948年撮影)」(国土地理院) を元に加工編集

鑑潟という潟があった。

現在の新潟市西蒲区。巻潟東インターチェンジの北西のあたり。今の福島潟より大きい潟だったが、1958～66年におこなわれた国営干拓事業によって姿を消し、農地になった。

本展ではその鑑潟とそこで生きた人々を写真で記録した石山与五栄門、消えた鑑潟を追悼するように幻想絵画をつむいだ樋口峰夫、潟が消えて28年後に詩集『鑑潟』を刊行した国見修二、少年期の鑑潟での体験から「ネイチャーアクアリウム」を創造した天野尚の4人を紹介する。

この文を書き出した時点(2019年6月)で、その4人のことを、実は私はまだ本当には、よく知らずにいる。

しかしかれらの「作物(作品)」には出会ってきた。ばらばらに。

古くは1989年。新潟市美術館で開かれた「新潟の絵画100年展」の企画を担当したとき、樋口の「干潟」という絵を借りて飾った。複数人で担当した展示だったので、当時まだ画家は存命だったけれど、お会いする機会を得ずにしまった。柴田長俊の絵と並んで展示されたその絵は、似た重い色調ながらより土臭い気配をはなっていた。そのとき私は鑑潟のよの字も、干潟というタイトルが何を意味しているかも知らなかった。

その樋口の遺作展が2010年弥彦の丘美術館であった。それを見に行ったころ、私の関心も「潟」へ向かいだしていた。樋口の終生のテーマのひとつが「消えた潟」であったことをようやく意識し、会場で販売されていた国見修二の詩集『鑑潟』(1994年刊)を買い、読んだ。

それから、何度読んだかわからない。ガツボ(真菰)、ボテ(籠)などの土地言葉をその本で知った。遊び場だった潟が消え、それが在った場所を太宰や賢治のように歩きながら紡がれた言葉なのだと読むうちに悟るようになった。

その少し前、新潟市で開催された「水と土の芸術祭」の初回(2009年)に「ここに鑑潟ありき。」という磯辺行久の作品があった。消えた潟の水際に旗を立て回したものだ。

芸術祭は北川フラムの着想で始まり、この初回はしきりに「水との闘い」が強調された。『葦沼』という映画の、特定の場面だけがくり返し上映された。1966年に終了した鑑潟干拓はその「水との闘い」の見事なまでの勝利(=悪水を克服し美田を得た)であり、戦果だったはずだが、磯辺の作品それ自体は闘いに負けた(干拓された)存在へむしる視線を向けさせるものだった。

北川の強調に、徐々に、やがてははっきり違和感を表明しはじめたのは、河川工学者で、4回続いた芸術祭のアドバイザー、参与などを務めた大熊孝だ。この川の専門家もそのころ潟へ関心を向けはじめていた。大熊は新潟の歴史は確かに水との闘いの連続だったが、それは「水と闘い過ぎた歴史」でもあったのではないかと主張する。制圧されて一面の田んぼに変貌する前の平野の地図やその復元を、そのころからよくあちこちで見かけるようになった。その古地図上には中小の河川で結ばれた無数の潟が、惑星のように散らばっていた。

少年の頃、千葉県船橋市でむさぼるように読んだイギリスの児童文学を私は思い出した。子供たちの水辺での冒険を描いたアーサー・ランサム(12冊)の物語(ランサムサガ)である。その1冊『オオバンクラブの無法者』(新訳は『オオバンクラブ物語』)では、物語の舞台ノーフォーク湖沼地方(ブローズ)の地図が見返しや本文中に挿入されている。それは越後平野の古地図に酷似していた。そして水と闘い「過ぎ」なかったイギリスでは、ランサムの地図のままの湖沼や河川が今も物語が書かれた1930年代のままあるのだった。

大熊にランサムを読んでもらい砂丘館で「『川博士』大熊孝さんと読むアーサー・ランサム『オオバンクラブ物語』」という全3回のセミナーを企画した(2013年)。その最終回に国見の詩集から「土手論」を私が朗読した。大熊はこのとき国見の詩を初めて知った。

大熊も深く関わった水と土の芸術祭2015(第3回)では、新潟市に残るいくつかの潟が作品設置会場になった。新潟市民プラザで2015年2月に開催されたプレシンポジウム(前年設立の新潟市潟環境研究所をお披露目する催しでもあった。同研究所は2019年に廃止)では、ピュー福島潟名誉館長の加藤登紀子が国見の「土手論」を朗読し、歌った。国見も舞台上に登場した。

鑑潟 (よろいがた)

かつて新潟県西蒲原郡(現・新潟市西蒲区)の旧巻町、旧西川町、旧潟東村にまたがって存在した湖。東西、南北2.5km。越後平野の湖沼の中でもっとも大きな潟だった。鑑潟周辺の人々は農業とともに漁労(フナ、コイ、ウナギなど)・狩猟(カモ、渡り鳥など)・採集(ヒシの実、ハスなど)という縄文以来の暮らしを継承しつつ、船遊びに釣り、美しい四季の風景に憩うなど、潟の豊かさを享受しながら潟と共生してきた。標高が低く度々水害に見舞われた周辺の低湿地では、江戸後期より鑑潟、田潟、大潟の三潟の水を抜くための新川掘削工事をはじめ、土地改造や耕地拡大の努力が続けられてきた。明治に入り干拓が進む前の鑑潟は、遊水池としての役割が大きかったが、戦後、急速な食料増産と周辺農家の要望により、全面干拓の計画がなされ、1958年「国営鑑潟干拓建設事業」が着工。潟に流入する3河川を新たに開削した水路に移し、5基の排水機場を造って潟水を排水するという大事業を実施した。1966年に全面干拓が完了し、翌年234haに及ぶ水田が造成されて現在に至る。



蓮の実を取る子供達 (撮影:石山与五栄門) 右端の腰をかがめた少年は樋口峰夫



舟に乗る少年達（撮影：石山与五栄門）

大熊は鰻潟を話題にし、その復活を自分は夢見ていると語りはじめていた。

そのとき『葦沼』の代わりに必ず映写されたのが、石山与五栄門の写真だった。巻（今は新潟市西蒲区）の郷土資料館で、巻町職員だった石山が編纂した「巻町双書」シリーズを閲覧したことがあったが、そこにも石山の撮影した多数の写真が掲載されていた。双書の一冊、写真集『鰻潟』の跋文に石山もまた「美田」「悪水」の語を用いている。その悪水と暮らした人々を彼は執拗にカメラで追ったのだ。ファインダーの中で、人々は必ずしも水と闘ってはいなかった。そう、石山も気づいていたはずだ。残された写真の子供や大人たちの生き生きとした表情を見るたびに、そう思う。

水と土の芸術祭2012あたりから、芸術祭関係者や出品作家たちが興味を向けるようになった郷土写真家、斎藤文夫が、師と仰いだのが石山だったと知ったのもそのころ。石山は斎藤に「時代は変わっていく。今を撮っておけば貴重な記録になる」と語ったという。

2018年夏、「人と潟の共存する未来」というシンポジウムがかつて鰻潟があった地にある新潟県農業大学校で開かれた。

そこで干拓に先立って行われた鰻潟周辺の民俗調査の内容を語った中島栄一の話が衝撃だった。鰻潟端の集落のなかには農業ばかりでなく、漁業、菱や蓮の実などの採集、渡り鳥を捕獲する猟など季節によって生業を変えていく生活が営まれていたことがそのとき分かったという。縄文時代の生活そのまま、と中島は言った。「縄文カレンダー」に書かれるような、四季の変化に応じつつ、自然に沿って生きる糧を得ていく生活である。縄文文化を本州から駆逐した弥生人の生活も四季の変化とともに営まれはしたが、彼らは自然に働きかけ、コントロールしようとした。その端的な働きかけの形が「干拓」だ。与えられた自然に沿うのではなく、自分たちに沿う自然を作り出そうとしたのだ。

干拓が計画されたとき、反対する人はなかったのか、と斎藤に聞いてみた。いなかったという答だった。食料増産の求められた時代だった。縄文的生活を営んでいた潟端の人々は農業者でもあり、潟

を田んぼに変えることに反対はしなかった。その後米余りの時代が来て、減反が始まろうとは誰も予想できなかったと。

国見も、樋口も、そして写真家であり、水景クリエイターとして著名になった天野尚も、風前の灯火のなかにあった鰻潟を、遊び場として、少年期を送った。石山の写真の蓮の実を採る少年たちの一人は子供時代の樋口だったと最近知った。やがて国見は詩を、樋口は絵をかいた。天野は独創的なネイチャーアクアリウムを創造した。天野はその原点は鰻潟の体験だったと語っていたという。田んぼにできたのだから、また潟に戻すこともできるはずだ、と彼が語る映像を、没後に開かれたある写真展会場で見た。

3人にとっての潟は、多様な生業の場である以上に、無数の生き物たちとともにあった世界だった。潟で遊ぶ少年は、ほとんど潟の生き物のひとつだ。変化を予感した石山と異なり、彼らは突然訪れた受難者の側に身を置いていたとも言える。だからこそ「潟は語ることがある／幾百万の生物と風と水が／泥の手触りの記憶のなかで／眼を開き始める」という国見の詩句や、ナマズが屹立し仏になった樋口の幻視や、ガラスの箱の中に水中の植物や魚の小宇宙を創る天野のネイチャーアクアリウムが生まれた。近年刊行された児童文学『河童のユウタの冒険』（斎藤惇夫著 2017年 福音館書店）では推定年齢数百歳の少年の河童が、狐と天狗とともに福島潟から信濃川の水源地まで遡る旅をする。旅の目的は、人の行為によって無念の死をとげた生き物たちの魂を解放することだったことが最後に明らかになる。潟や川の生き物たちの存在を、人の生活と経済のために「無」とみなした過去への痛恨の念が、こうして表明される時代になった。

「そこでは風土と生活と人がいつも握手していた」と国見は記憶の鰻潟を想い、詩に書いた。

その過去形の世界を、4人の表現者たちとともにたどりながら、かろうじて全ての潟をまだ失っていない私たちの風土と、生活と、人の現在と未来について、考えたい。

（砂丘館館長）

Ⅰ 展示作家紹介 (五十音順)

天野尚 (あまの たかし)

1954年新潟市(旧巻町)生まれ。写真家、水景クリエイター。75年よりアマゾンをはじめとした熱帯雨林の撮影に取り組む。2008年のG8北海道洞爺湖サミット会場に佐渡原始杉の特大写真パネルが展示されるなど、独自の生態風景写真は国内外で高く評価された。豊富な自然経験をもとにネイチャーアクアリウムを確立し、株式会社アクアデザインアマンを創設(92年)。東京スカイツリータウン・すみだ水族館やポルトガル・リスボン海洋水族館などでも巨大なネイチャーアクアリウム(最大40m)を制作した。2015年没。

石山与五栄門 (いしやま よごえもん)

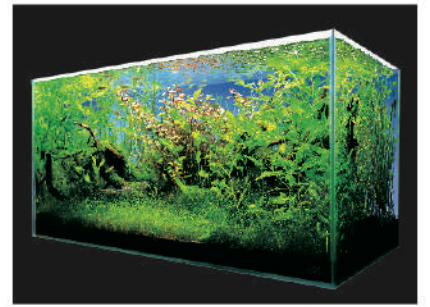
1923年新潟市(旧巻町)生まれ。10代から写真を撮り始める。55年巻町公民館主事となり、巻町の民俗、自然、歴史を紹介する巻町双書の刊行を始め、編集に携わる。同双書は石山の存命中37冊が刊行され全国的にも注目された。鎧潟干拓に際して行われた総合調査にも町の担当職員として関わる。64年巻町双書の1冊として刊行された『写真集 鎧潟』は、石山が10年をかけて潟の風土と人々の生活を撮影した写真で構成された。74~94年巻郷土資料館館長をつとめた。97年没。

国見修二 (くにみ しゅうじ)

1954年新潟市(旧潟東村)生まれ。詩人。上越教育大学大学院日本文学専攻 修了。日本詩人クラブ、高田蒼女の文化を保存・発信する会理事。少年期を鎧潟で遊び、その埋め立ての様子を直に見届ける。著書に詩集『鎧潟』『蒼女歩く』『越後郷愁はさ木と雁木と蒼女さんと』『母は焚き木です』など。

樋口峰夫 (ひぐち みねお)

1943年新潟市(旧巻町)生まれ。日本画家。鎧潟の自然に親しんで育つ。石山与五栄門撮影の潟で蓮を取る少年たちのひとは少年時代の樋口である。中学卒業後家業(木材店)を継ぎながら絵を学び始める。丸山翠城、小泉藍田、梁取幹雄、橋本龍美に師事。橋本から特に大きい感化を受け、原体験としての鎧潟のイメージをモチーフに多くのすぐれた作品を制作した。84年創画展で創画会賞を受賞し、会友となる。2005年没。



ネイチャーアクアリウム(アクアデザインアマン)
少年の頃にのぞいた潟の水中央景観の残像が水槽の中で蘇る。



国見修二 詩集『鎧潟』1994年 土曜美術社
失われた鎧潟の記憶を見つめた一冊。



樋口峰夫「読み」1981年 岩絵具、紙 新潟市巻郷土資料館蔵
印象的な赤は、少年樋口が体感した潟の泥のイメージ。

Ⅰ 会期中の催し

潟をめぐるセミナー

— そこでは風土と生活と人が
いつも握手していた

1. 潟はどうしてできたのか・鎧潟をめぐる暮らし

8月17日(土) 14:00-16:00

講師:澤口晋一(国際情報大学教授・地理学)
中島栄一(潟東歴史民俗資料館館長)

2. 潟の生き物たち

さかな・鳥・植物...そしてアクアリウムのこと

8月31日(土) 14:00-16:00

講師:志賀隆(新潟大学教授・植物分類学)
井上信夫(生物多様性保全ネットワーク新潟)
大岩剛(アクアデザインアマン)

3. 鎧潟の記憶から未来の潟を考える

9月15日(日) 14:00-17:00

講師:大熊孝(新潟大学名誉教授・河川工学)
国見修二(詩人)
斎藤文夫(郷土史家・写真家)

各回 参加料500円(定員30名)

Ⅰ アクセス



砂丘館

旧日本銀行新潟支店跡

指定管理者:新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体
新潟駅万代口より浜浦町線C2系統または
観光循環バス乗車「西大畑坂上」下車徒歩1分

新潟市中央区西大畑町5218-1

私たちは砂丘館の自主事業を応援しています。

雪国あられ株式会社 NSGグループ

ISHIKAWA 新潟ビルサービス

創業明治11年 丸屋本店 藤田金属

WIND 郷土の文化に親しむ会

申し込み (受付開始 8月7日)

砂丘館・電話・ファックス 025-222-2676
E-mail sakyukan@bz03.plala.or.jp まで

*ファックス、E-mailでお申し込みの場合は
連絡先(電話番号)、人数を併記してください。

※会場には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用ください。

※新潟市西側地下駐車場をご利用の方は駐車券提示で1時間分の無料券を差し上げます。

水と土の
文化創造都市

Creative City of Water and Land - Niigata

この事業は新潟市からの補助金を受けて実施しています。